

秋作ジャガイモの栽培法

1 栽培のポイント

(1)種イモは、しわなどが無く老化しておらず、ウイルスなどに汚染されていない市販のものを用い、毎年更新するとよいでしょう。

(2)ジャガイモには、一定期間、発芽適温でも芽が動かないという休眠現象があります。休眠がさめ、頂部の芽が2～3芽動き出した状態が種イモとして最適です。

(3)そうか病の発生を防ぐため、石灰類の多量施用はさけます。土壌は pH5～5.5 の弱酸性が最適です。

(4)連作を嫌うのでナス科野菜(ナス、トマト、ピーマンなど)を2～3年作付けしていない水はけの良い畑を選びます。

(5)多肥はイモ数の減少や変形イモの発生、デンプン価の低い水イモになる原因になるので、多肥を避けます。開花後に生育が止まり、収穫前に葉が自然に黄変するような施肥量が適しています。

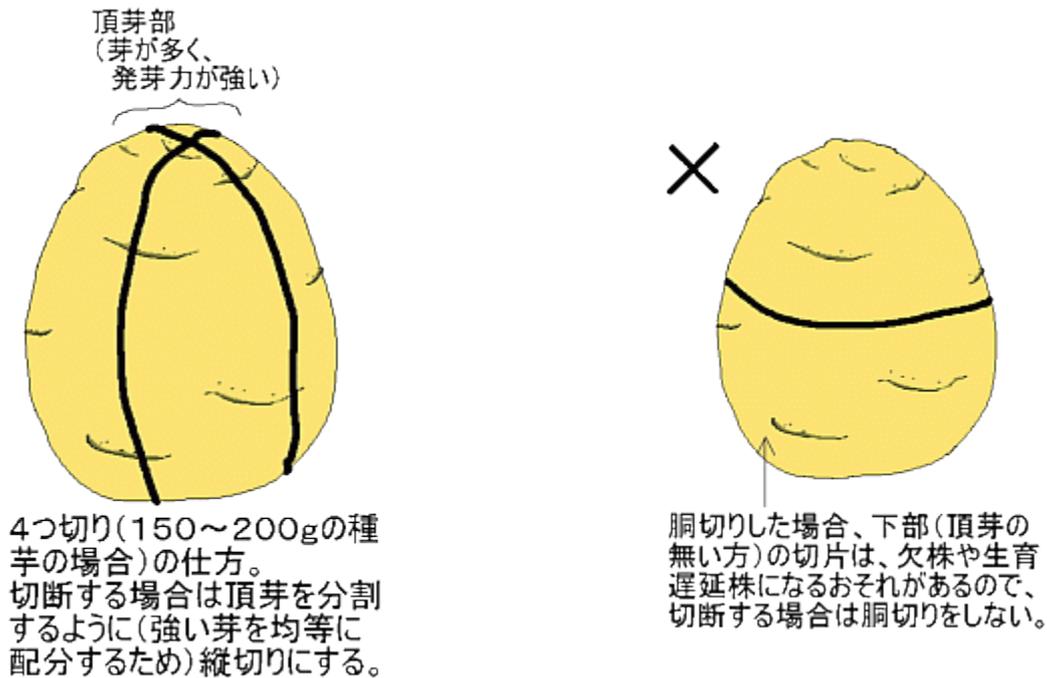
2 畑の準備

過湿地は避け、できるだけ早い時期に堆肥や石灰類をまいて耕し、土をよく風化させておきます。施用量は1㎡当たり苦土石灰 50g、完熟堆肥 1kg が標準的な例です。

3 種いもの準備

種いもの入手後、すぐに袋を開いて点検し、腐敗いも等があったら取り除き、植え付けまでに冷暗所に広げておきます。そして、植え付け4～5日前頃、図一1を参考に1片が 40～50g となるように切断します。30～60g の種イモは切断せずにそのまま使用します。切断の仕方は、いもの頂部は芽が多く萌芽が早いので、芽の発生を均等にするために縦断とします。種芋量は1㎡当たり 200～240g 必要です

<種イモの分割方法>



4. 植え付け

9月上旬前後が植え付け適期です。植え溝を掘り、溝に元肥 80g~100g/m²(N-P-K =10%-10%-10%)を施し(前作に肥料が残っている場合は施さなくても良い)、土と混ぜます。うね幅 60cm の1条植えとし、深さ7cm程度の植え溝に23cm 間隔に1個ずつたねいもを並べ、埋め戻します。そして高温を避けるため周りにわらか刈り草を厚くかぶせておきます。種いもは切り口を下にし、傷口に雨水が進入しないようにして伏せます。

◎残暑が厳しい年は、芽出し床で出芽させて移植させて発芽不良になりにくい

<芽出し床の管理>

8月中旬に種イモを切り半日陰に置き、切り口にカルス(治癒組織)ができるように濡れたむしろなどをかけておきます。4~5日後にプランターか発泡スチロール箱に砂を薄く敷き、種イモをつめて並べ、5cmくらい覆土します。軒下などの涼しい場所に置き、腐敗イモを少なくするために水は控えめにしておきます。そして茎が3cmくらいになるまでに本圃に定植します。

5. 芽かき

茎数が多くなると、着くいもが増えてくずいもが多くなります。出芽後なるべく早い時期に、勢いの良いものを1~2本残して他は取り除きます。このとき、種いもが持ち上がらないように、片手で芽元を押さえて不要の芽を引き抜きます

6. 中耕・土寄せ

土寄せはいもの着生を良くし、緑化イモを少なくし、水はけ、通気性も良くなり、茎葉の倒伏防止や除草効果があり非常に大切な作業です。土寄せは1回に多くの土をかけると、イモが肥大する部分

の地温が上がりにくくなるので、2回に分けて行います。1回目は萌芽揃い後、くわで4～5cmの深さに軽く中耕してから、通路の土を株元へ5cm位の高さになるように土寄せします。2回目は着蕾時に、培土の山と谷の差が25cm前後になる程度土寄せをします。

7. 収穫

茎葉が黄色く枯れ始めた頃、天気の良い日に掘取ります。収穫後のいもは表面がぬれたまま積み上げると腐りやすくなり、光に当てると緑化し品質を損ねるので、収穫したら積み上げないようにして日陰で乾かします。多湿時に掘取った場合は、泥がついているものは風通しの良い日陰で4～5日風乾します。

8. 貯蔵

腐敗イモや傷イモを正常なイモと一緒に保存すると正常なイモも腐敗する場合がありますので分けます。暗くて風通しの良い場所に保管すれば、2～3カ月は保存が可能です。

[\(戻る\)](#)